

鎌倉の中世和鏡に関する一考察

青木 豊（國學院大學文学部教授・鎌倉歴史文化交流館長）

はじめに

我が国の和鏡は、平安時代後期の 12 世紀前葉から中葉に作鏡が開始され、鎌倉時代の前葉から中葉に相当する 12 世紀後半から 13 世紀前半頃が和鏡製作の完成期であったと考えている。

つまり、篋使い等に拠る鏡範製作技術の高揚・鏡背意匠の円熟・鏡胎の重厚化・鏡背仕上げの入念化などの作鏡技術が相俟った結果が、当該期であったと評価されるのである。このような、和鏡の歴史の中で鎌倉での出土鏡は、平安時代末葉から鎌倉時代後期は一部含むものの、大半は上述した和鏡の完成期と符合するのである。中世以降の和鏡は、現時点では確認できない点も当然のことながら当該地域ならではの特質の一つである。

鎌倉での和鏡の検出は、記録で知る限りでは後述するように明治 20 年（1887）に始まるようで、その後いくつかの事例を認めることは出来るがそれらの資料の実態に関しては、鎌倉市には郷土博物館が永らく存在しなかったこともあってか不明資料が多いのが現状である。

したがって、本論は、鎌倉出土および伝世鏡の網羅的把握を目的とし、さらにその上で鎌倉での和鏡の鏡信仰形態を具体的に追及することを目的とするものである。

1、鎌倉出土鏡の記録と研究史

出土鏡

明治 20 年（1887）、2 面の和鏡の出土記録と、昭和 7 年（1932）に双雀鏡の出土が赤星直忠により記されている^{註1}。本記事を鎌倉における出土和鏡に関する記載の濫觴とするようである。

次いでは、亀田輝時・赤星直忠・関靖・磯貝忠・太刀川総司朗・進藤瞬らによって、昭和 7～同 20 年まで永きに亙り実施された“鎌倉史蹟めぐり”は、「鎌倉史蹟めぐり会記録」として報告がなされ、その数 95 回を数える。昭和 47 年には、『鎌倉—鎌倉史蹟めぐり会記録—』として上梓されていることは周知のとおりである。当該書の「第 57 回 昭和 12 年 9 月 19 日 [参加者] 太刀川・亀田・進藤・赤星」の項に、材木座の飯島出土の 12 面の和鏡についての記載が認められる^{註2}。

また、当該資料は、行政区としては逗子市に属することもあってか、これらの鏡および懸仏等の遺物は鎌倉市の文化財関係機関には保管されていないが、赤星直忠が著した『中世考古学の研究』に 12 点の和鏡の写真が掲載されている（写真 1）^{註3}。極めて残念ながら、全体的に印刷が悪く鏡の詳細情報を判じづらい写真であるが、鏡の縁の厚さと界圏の太さから鏡群の時代観察をすると以下のとおりである。

まず、最上段中央の小形の円形上のは鏡であるかどうかも識別し得ない。写真の配置は、鎌倉前期から後期に向かって時代順に 3 面単位で左から右にならべたうえで、さらに時代が新しくなるにしたがい下方に向かって配されているようである。方鏡が一面有り、他は円鏡である。『鎌倉—鎌倉史蹟めぐり会記録—』にも明記されているように柱や梁への固定を目的とした後天的な単孔もしくは双孔が確かに認められる。前述したように、鏡縁の厚さと界圏の太さのみを以って所属時代を思考した場合、鎌倉時代前期から中期の所産であろうと推定される鏡群である。

昭和 46 年に鎌倉国宝館は、鎌倉市内出土資料を集成した『鎌倉の中世出土遺品』を刊行している^{註4}。その図版 27 に赤星直忠所蔵と記した出土鏡 1 面の写真図版が掲載されているが、破鏡であり遺存状態も極めて悪いところ

から詳細は観察できない（写真 2）。事実資料解説にも「腐食が甚だしく判然としない。小町出土という。」と記している。縁厚および形状から鎌倉時代前期の所産かと推定される。

昭和 49 年には、鎌倉市教育委員会より『鎌倉の文化財 第 4 集 鎌倉市指定編（四）』が刊行され^{註 5}、後述する報国寺蔵の牡丹蝶鳥鏡大形鏡が解説を伴い紹介されている。

昭和 57 年に岡山仁は、『鎌倉考古』に「千葉地遺跡出土の和鏡」と題する論文で^{註 6}、図 5 - 2 - 13 の水辺双雀鏡について資料紹介をするなかで、出土層位から鎌倉時代末期以前の所産とすると同時に、厚木市に所在する八菅山経塚出土鏡とも比較して鎌倉時代の和鏡であると記している。なお、興味深いことは、「本資料と直接結びつかどうかは即断できないが鏡管の蓋と思われる黒漆塗の容器が数点出土している」と記述している点は注意を有する。

昭和 59 年に鎌倉国宝館は、新館落成に係る記念事業として“鎌倉国宝館落成記念 館蔵名品展”を開催し、当該特別展の図録に明治 6 年のウィーン万国博覧会に出品するも帰路伊豆半島沖で、昭和 59 年 3 月 20 日未明に沈没したフランス郵船ニール号と共に沈んだ鶴岡八幡宮所蔵の“政子の手箱”模写図巻（鎌倉国宝館蔵）と、同じく鎌倉国宝館蔵の鎌倉時代前期に比定される典型的な鎌倉時代鏡である秋草双雀文鏡（竹籬秋草双雀鏡）の写真が掲載されている（写真 3）^{註 7}。当該竹籬秋草双雀鏡は、鏡縁は中厚で太線界圏を有し、蕊座中隆鈕を付置する 13 世紀前半頃の伝世鏡である。後天的な単孔を有している点から、寺社の荘厳具か神輿の辟邪・荘厳に使用された可能性が予想される。

なお、“政子の手箱”内の鏡は上記模写図と、後に記述する『集古十種』の記載図に描かれている。

昭和 60 年に、鎌倉国宝館は続いて「鎌倉の金工」と題する特別展を開催している。当該特別展示の図録『鎌倉の金工』^{註 8}の中には、前述し、また後述するところの報国寺蔵の牡丹蝶鳥文鏡（写真 10）以外に、昭和 59 年にも展示された国宝館所蔵の写真 3 の秋草双雀文鏡（竹籬秋草双雀鏡）・瑞泉寺蔵の籬梅双鳥文鏡（籬梅樹双雀鏡写真 4）が掲載されている。秋草双雀鏡（鎌倉国宝館蔵）は、面径 11.4 cm を測り 13 世紀前半に比定されているが、鈕は蕊座中隆鈕を置く 13 世紀中葉鎌倉鏡を代表するとも表現できる秋草意匠鏡である。籬梅樹双雀鏡（瑞泉寺蔵）は、鈕は亀鈕を布置し、双雀も接嘴するところから 13 世紀末葉頃の所産と写真からは看取される。また、両和鏡とも出土鏡ではなく明らかな伝世鏡であることも特長とする。

さらに、小坪大塚出土の 2 面の和鏡が掲載されている（写真 5）。右は、面径が記されていないので不明瞭であるが、恐らく面径 11 cm 前後の鏡と見られる。中縁を呈し、太線界圏で鈕は花蕊鈕を附置する菊水双雀鏡で、鎌倉時代中～後期の所産と観察される。一方、左は小形で、界圏・鈕座の形式から察して室町時代と観察されよう。

平成 2 年（1990）の『よみがえる中世 3』には光明寺境内出土鏡の写真（写真 6）が掲載されている^{註 9}。斎木秀雄による「化粧と装身」のなかで写真のみが揚げられており、解説等は全く記されていない。依存状態も良くないのか、写真も不明瞭であるが鈕は亀鈕を置き、中太の界圏を配し、縁は中縁であるところから鎌倉時代後期の所産とみられる和鏡である。

同じく平成 2 年に刊行された鎌倉考古学研究所による『古都鎌倉の埋蔵文化財』にも出土和鏡の写真が掲載されている^{註 10}。

平成 6 年に宗臺秀明は、「鎌倉市内出土の鏡鋳型」と題する論文^{註 11}のなか鎌倉での鏡鋳型が由比ガ浜三丁目 258-1 地点（HK 遺跡）・今小路西遺跡（IN-2 遺跡）・INK 遺跡出土の鋳型から、鎌倉での作鏡を指摘するなかで、“所在不明”と記されている流水梅花双雀鏡（梅花州浜双雀鏡）の拓影を掲載しているところから、その具体が把握できる（図 1）。

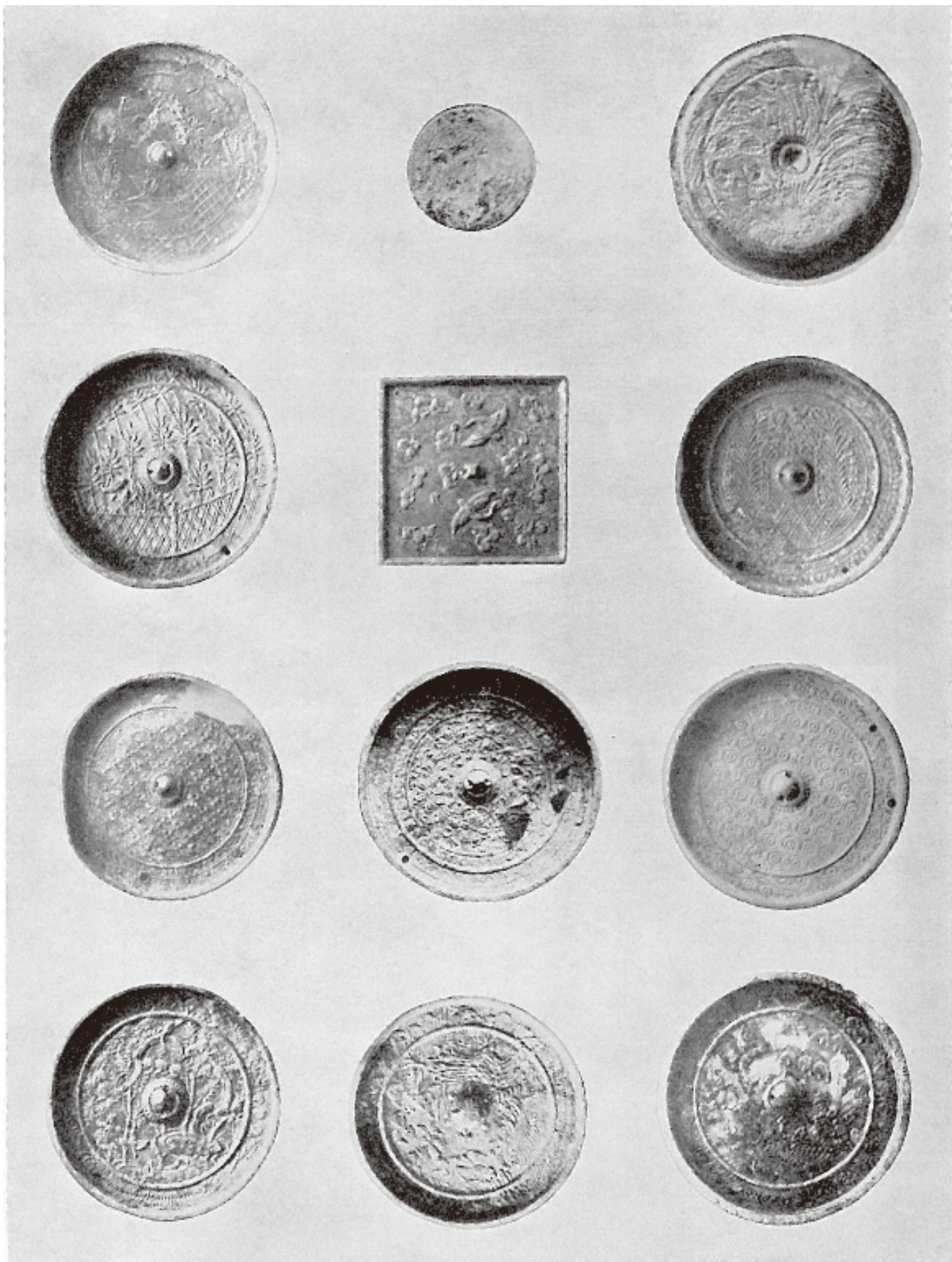


写真1 材木座飯島（飯島やぐら）出土の和鏡
（昭和12年撮影・赤星直忠『中世考古学の研究』より転載）



写真2
(鎌倉国宝館図録『鎌倉の中世
出土遺品』より転載)



写真3 鎌倉国宝館蔵鏡
(『鎌倉国宝館新館落成記念
展—館蔵遺物記念—』より転
載)



写真4 瑞泉寺蔵鏡
(鎌倉国宝館図録『鎌倉の金
工』より転載)

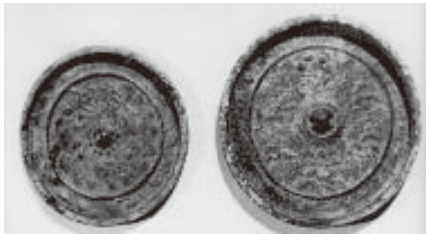


写真5 小坪大塚出土鏡
(鎌倉国宝館1985『鎌倉の金工』
図62より転載)



写真6 光明寺境内出土
鏡 (『よみがえる中世3』
より転載)

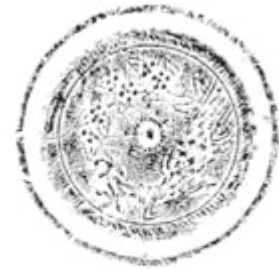


図1 梅花州浜双雀鏡
(宗臺秀明「鎌倉市内出土
の鏡鑄型」より転載)



写真7 一の鳥居東方地点上層の
土壙墓 (『平泉と鎌倉—永福寺』よ
り転載)



写真8 永福寺経塚出土状態

平成7年に、「蘇れ黄金・平泉祭実行委員会」編による『平泉と鎌倉—永福寺遺物展記念—』の中に“一の鳥居東方地点上層の土壙墓”写真が掲載されているが（写真7）^{註12}、遺跡名・出土鏡は不明である。

平成15年に、鎌倉国宝館は「没後750年記念特別展北条時頼とその時代」と題する特別展を開催し、同図録には^{註13}、宗臺秀明によって「鎌倉市内出土の鏡鑄型」に掲載された梅花州浜双雀と、後述するところの建長寺所蔵の“円鑑”が紹介されている。これらは、いずれも和鏡自体に軸足を置いて記載されたものでは決してなく、写真の掲載に留まっていることも鎌倉の和鏡に関する研究の歴史的特徴であるといえよう。

続いて平成17年には、同じく『鎌倉考古』に菊川泉は、「永福寺のもう一基の経塚」のなかで^{註14}、経筒外容器あるいは経筒と見做される13世紀初頭の常滑壺の蓋として用いられていた花菱浮線稜文蝶鳥鏡（写真8・図5-1-3）について記している。

出土鏡ではなく伝世鏡である報国寺所蔵の後述するところの牡丹蝶鳥鏡に関しては、昭和49年に中野政樹が『鎌倉の文化財 第四集 鎌倉市指定品（四）』のなかで、写真と若干の解説を記している^{註15}。

さらに、原田一敏は平成13年2月に報国寺所蔵の牡丹蝶鳥鏡に関して、『MUSEUM』に「牡丹双鳥鏡考—和鏡における絵画意匠の導入と同一文様の形式的変遷—」を記している^{註16}。当該論文は、鎌倉の和鏡に関する最初の論文と看取されるのである。

2、『集古十種』に収録された鎌倉の寺社伝世鏡

寛政12年（1800）から松平定信らによって刊行され始めた『集古十種』の『集古十種 銅器（一）』の中に、次の3面の鎌倉に関係する鏡が収録されている（図2）。巻之一の巻頭に「相模国鎌倉鶴岡八幡宮蔵政子十二手箱中鏡図」、次いで「相模国鎌倉報国寺蔵仏乗禅師鏡」、さらには「相模国鎌倉禅居菴蔵大鑑禅師鏡」である。

鶴岡八幡宮政子十二手箱中の鏡は、前述したようにウィーン博覧会の帰路東京を目前に伊豆沖で沈没したフランス艦ニール号と共に海中に没した悲運な歴史を有する鏡である。『集古十種』掲載図からは、面径約11cmを測り下辺に州浜を配した満花菊双雀鏡と観察される。恐らく、鑄上の良い白銅製和鏡で、鎌倉時代中期から後期の所産と推定される。

次いで、相模国鎌倉報国寺蔵仏乗禅師鏡は、後述するところの牡丹蝶鳥鏡で面径22,6cmを計測する大形鏡である。当該牡丹蝶鳥大形鏡については、別途後述する。

相模国鎌倉禅居庵は、元徳年間（1329～1331）に創建されたと伝えられる建長寺境外に在る建長寺の塔頭寺院である。本禅居庵蔵大鑑禅師鏡は、『集古十種』の図から判断すると面径約11cmを測る六花形を呈する湖州鏡である。鏡背には「湖州真石家 念二叔照子」と陽鑄されており、時代は南宋時代の所産である。湖州鏡は、我が国へは多量に輸入されたらしく全国の経塚からの出土をはじめ、寺社における伝世も決して珍しくないところから、鎌倉の寺に伝世しても何ら不思議のない鏡である。

上記した3面と、以下に記述する『新編鎌倉志』^{註17}記載の1面を加えて、鎌倉の社寺には4面の鏡が伝世しており、歴史的にその存在が周知されていた鏡である。この意味でも資料的価値は、極めて高いと言わねばならない資料群である。

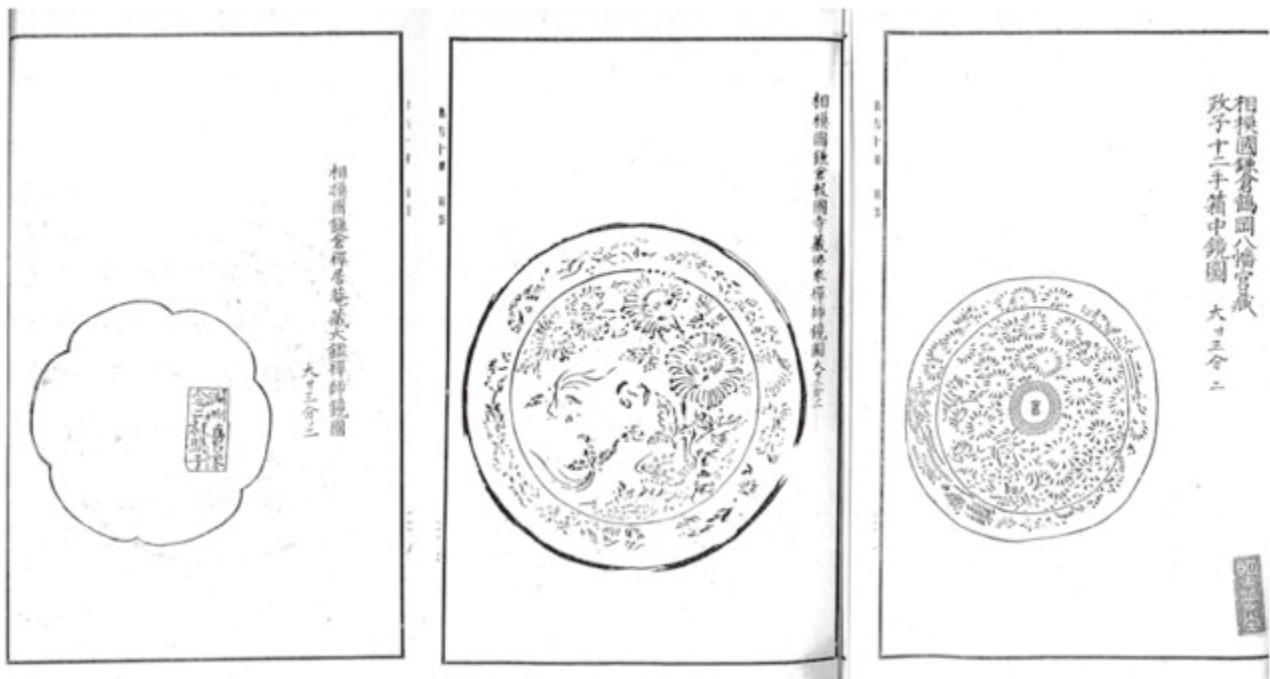


図2 『集古十種』収録の鎌倉の鏡（筆者蔵）

3、鎌倉の寺院伝世の鏡

『新編鎌倉志』に記載されている建長寺伝世の円鑑（鼎形鏡）

建長寺の開山大覚禪師愛蔵と伝えられる鼎形鏡が伝世している（図3）。当該鏡に関しては、同じく『新編鎌倉志』に下記の記事が確認される。さらに、東福寺海蔵院虎關師鍊が記した『元亨釋書』^{註18}、『日件録』^{註19}、『東国紀行』^{註20}にその記事が認められることが記されている。『元亨釋書』は、30巻からなる仏教史書で、完成は元亨2年（1322）とされる。したがって、『新編鎌倉志』の当該鏡の以下の記載は信憑性を帯びているのである。

寺宝 円鑑 一面 厨子に入、西来庵にあり。開山所持の鏡なり。高さ三寸あり。鏡面に、観音半身像、手に団扇持少し俯したる様に見ゆるなり。頭に天冠をいただく。首尾、如意の如に見ゆる物の端に、瓔珞を垂る。珠を連る糸はなし。下に巾の如くなる物を著わす。眼裏に晴を不入。鏡後に、水中に三日月の影、逆に鑄付。其高さ半分ばかりあり。上に梅枝を鑄付たり。是を円鑑と号する事は、開山在世の時より、自円鑑と額を書、今に昭堂に掛させ給を以てなり。其図如左。【元亨釈書】に、大覚禪師所持の鏡あり。没後其徒これを収む。或人夢みらく、其鏡禪師の儀貌を留むと。徒に告て乞見れば髣髴として観自在の像ににたり。賭徒傳へ見て異之。平師 平時宗 これを聞て、請て府に入る。其膾腴を疑て、工に命て磨治せしむ。初め幽隠なり。一磨を経て、大悲像、鮮明巖好なり。平師悔謝して作礼す。後に寧一山記作るとあり。【日件録】に西来庵に大覚禪師の円鑑あり。親たりこれを拝すれば、鏡中に観音の半身の像あり。手に芭蕉の扇を持。正しく視れば朦々として、眇に見れば儼然たりとあり。又宗牧【東国紀行】に、建長寺御影堂の鏡の面くもりたるに、十一面の尊容、さだかにをがませられたりとかけり。十一面には非ず。図の如なる像なり。寧一山及諸師の記文左如。

本鏡は、鼎形鏡式からしても和鏡ではなく、宋鏡もしくは明鏡と観られる。また、本鏡のさらなる特徴は鏡面に「観音の半身像」が見えるということである。筆者は、実見していないので明確には判じ難いが、蹴彫りによるものかと推定されるが、魔鏡研究者の間では魔鏡として取り扱われているようであるところから、一般的な蹴彫りではないのかもしれない。後日、出来れば熟覧の機会を得て明らかにしたい。

円環を付帯する類似資料としては、王綱杯による『清华銘文鏡』のなかに類例鏡が認められる（写真 9）^{註 210}。当該書は、書名が『清华銘文鏡』であるところからも理解できるように、鏡鑑に陽鑄された銘文鏡の集成であり、したがって呼称名も陽鑄された銘文から「河澄交月銘詩文鏡」と命名されている。

しかし、形態から命名すると“環付鐘形鏡”であり、所属年代は南宋時代の所産と明記されている。具体的には鐘形を呈し、鏡背に大きな別鑄の環を付帯している。鏡背には「河澄交月 波清暁雪」8字による詩文と中央に火炎(?)を挟んで二振りの剣が陽鑄されている。本鏡の最大の特徴は、環を付帯する点であり、この点が建長寺伝世の円鑑（鼎形鏡）と鏡の形は違えども共通する点である。南宋鏡の形態的特質かとも思える。



写真 9 環付鐘形鏡
（『清华銘文鏡』より転載）

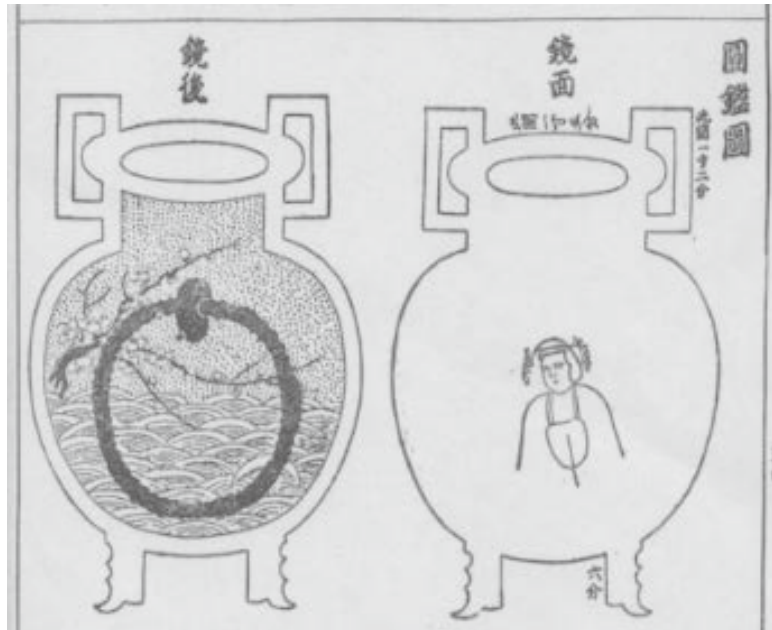


図 3 円鑑（『新編鎌倉志 卷之三』より転載）

報国寺伝世の牡丹蝶鳥大形鏡

報国寺伝世の牡丹蝶鳥大形鏡は、前述したように『集古十種』にも収録されている鎌倉時代を代表するとも言える大形和鏡で、その存在は古くから知られていた。昭和 44 年 10 月 18 日付けで鎌倉市指定文化財となっているが、同種の意匠を有する大阪市四天王寺蔵鏡は重要文化財であり、後述する滋賀県浄信寺蔵の牡丹獅子蝶鳥鏡（図 4-5）に至っては紀年銘が在ることもあって国宝である。故に、少なくとも神奈川県指定となっても何ら不思議の無い鏡であると観察される。昭和 49 年刊行の『鎌倉の文化財 第 4 集 鎌倉市指定編（四）』に中野正樹によって資料紹介がなされていることは述べたとおりである^{註 220}。

牡丹蝶鳥鏡に関する先行研究としては、原田一敏による「牡丹双鳥鏡考—和鏡における絵画意匠の導入と同一文様の形式的変遷—」があることは前述したとおりである^{註 23}。該書によると、牡丹双鳥鏡・牡丹蝶鳥鏡に加えて獅子や猿を付置した鏡をあわせて 15 面が現存していると記されているところから、和鏡の中では希少な鏡群であることは事実である。牡丹双鳥鏡・牡丹蝶鳥鏡は、平安時代末頃から鎌倉時代末に互り隆盛する大形鏡に限定されると言っても過言ではない鏡背意匠である点を一特徴とする。

図 4 は、「牡丹双鳥鏡考」で原田が図示した拓影に筆者採拓資料を加えて牡丹蝶鳥鏡の形式的変遷を通観する目的で再編したもので、以下当該図にしたがって報国寺所蔵の牡丹蝶鳥鏡の作鏡年代について考察する。

当該鏡群は、一般に面径 20 cm前後を計測し、鏡制において鈕は素円低隆鈕を付置し、界圏は中もしくは太単線で、鏡縁は蒲鉾式低縁あるいは中縁を呈する点で共通性を有する。ただ、これらの点は牡丹双鳥鏡・牡丹蝶鳥鏡のみに限定されるものではなく、当該期の大形鏡の共通鏡制でもある。鏡背意匠は、下辺に州浜を描き州浜の右下から立ち上がる牡丹樹は界圏に沿って右から左に撓める構図を採用する。撓められた牡丹の先端部と下辺の州浜の鏡背面左中央空間には、双鳥を付置するのが基本的構図である。

蝶鳥鏡の場合の蝶は、双鳥の上部すなわち内区左中央空間もしくは外区上辺に付置されているのが常である。具体的には、平安時代終末期から鎌倉時代初期頃の蝶は、鏡背面の内区左中央空間に飛行状態で描かれるのに対して、鎌倉時代中期になると外区の上辺に 4~6 頭羽を上げた状態で平面的に描かれるようになる。

牡丹蝶鳥鏡・牡丹双鳥鏡の鏡背意匠は、抜本的に平安時代以来形成され発展してきた秋草・双雀による雅趣に富む和風文様ではない。文様構成要素である牡丹・尾長（鳳凰）・蝶は明らかに唐様意匠であり、鈕もまた当該期の和鏡に配置される花蕊座鈕ではなく唐・宋鏡に一般的である素鈕であり、蒲鉾式低縁である点の一部を除き共通特性とする鏡群である。さらに、牡丹蝶鳥鏡は極一部を除き、大形和鏡専用の鏡背意匠である点も本意匠の特徴である。

このような和鏡における唐様意匠・唐様鏡制は、平安時代後期に出現する所謂“多度式鏡”や鎌倉時代中期から後期に作鏡される“擬漢鏡”“擬唐鏡”に確認される唐様鏡式である。当然、作鏡には大陸からの渡来鏡工の介入を十分予想しなければならない。“擬漢鏡”“擬唐鏡”の鑄型の出土は、京都市内でも場所が限られるところからも渡来宋人の存在も想定しなければならない点であると考え^{註 24}。しかし、当該鏡群は京都での作鏡であろうが、未だ鑄型は検出されていない。

牡丹蝶鳥鏡大形鏡・牡丹双鳥大形鏡の現存数は、前述の原田論文で 15 面集成していることは述べた通りであるが、現在判明する現存総数は約 20 面を数える。これらの中で、紀年名を有する鏡は、鹿児島県川内市に所在する新田神社所蔵鏡（図 4-4）と滋賀県浄信寺所蔵鏡（図 4-5）の 2 面のみである。共に針書による紀年名で、新田神社所蔵鏡は、永仁 2 年（1294）、浄信寺所蔵鏡は建武 2 年（1335）をそれぞれ刻する。これら 2 面の紀年名鏡を基本に報国寺蔵の鏡の所属年代を以下考察する。

図 4-1 の久保惣記念美術館所蔵鏡は、平安時代後期の和鏡と同様に鏡胎は薄く、篋押しも浅く、結果文様の鑄あがりも優雅である。また、蝶は双鳥が描かれる空間のなかに飛遊状態で自然と描かれている。図 4-2 の大国魂神社所蔵鏡も図 4-1 とほぼ同様な鏡制を有し、蝶も同様に左空間内に遊飛する。これら 2 面は、写真 10 及び図 4 の中では最も古い様相を呈し、平安時代極末から鎌倉時代極初期の所産と観察される。

図 4-3 の東京国立博物館所蔵鏡は、鏡制は基本的に同様であるが鏡胎は厚くなり、界圏は太く施されている。意匠表現は、高肉表現で鏡背面を埋め尽くしている。蝶は遊飛的には描かれず、外区上面に平面的に且つ規則的に描かれるなど完成期の硬渋化が顕著に認められる。

図 4-4 の紀年銘鏡である新田神社鏡は、蝶鳥鏡ではないため比較は難しいが、牡丹の表現は新田神社鏡より先行するものと観察される。しかし、新田神社鏡の尾長鳥の尾は写真 10 及び図 4-3 より短いところから、製作時期は紀年銘よりはやや古い作鏡である可能性も指摘できよう。

図 4-3 の国立博物館蔵鏡と蝶を含めて同様な意匠を呈するが、双鳥の表現を国立博物館蔵鏡と比べると接嘴に近い状態であるところからほぼ同時期の 13 世紀中頃の、当該鏡種の完成期の鏡であると看取されよう。

写真 10 の報国寺蔵鏡は、面径 22.6 cm と当該鏡群のなかでも大きく、且つ篋使いにおいても入念で上手である。

図 4-5 の浄信寺鏡は、素鈕ではなく花蕊低隆鈕を採用し、州浜が消失しているところからも針書が明示する建武 2 年（1335）が妥当であり、この頃が牡丹蝶鳥鏡・牡丹双鳥鏡又鳥鏡の下限時期の所産と観られる。



写真 10 報国寺蔵



3 東京国立博物館蔵

(原田一敏 2001. 2 「牡丹双鳥鏡考—和鏡における絵画意匠の導入と同一文様の形式的変遷—」『MUSEUM』 No. 570 より転載)



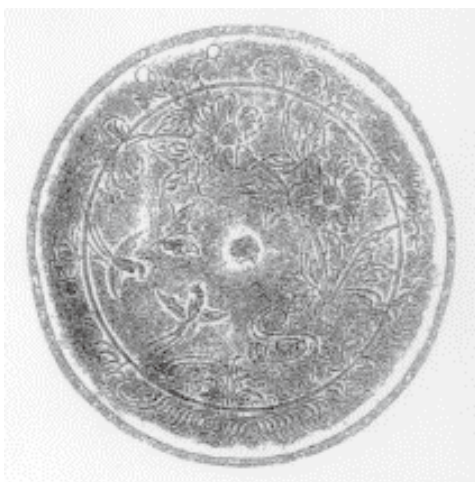
1 和泉市久保惣記念美術館蔵

(『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡拓影』1984 同美術館 より転載)

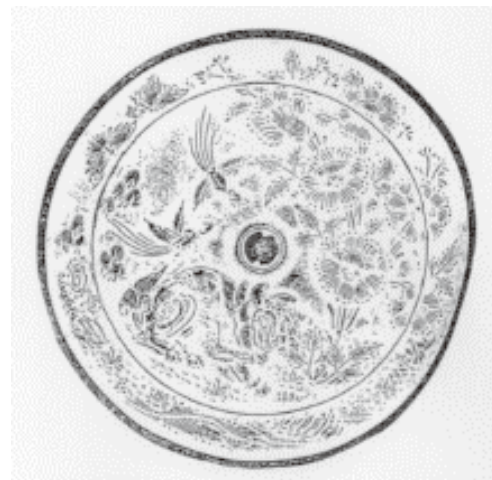


4 新田神社蔵

永仁 2 年 (1294) 針書



2 大國魂神社蔵



5 浄信寺蔵

建武 2 年 (1335) 針書

図 4 牡丹蝶鳥鏡拓影集成 (写真 10・1~5)

したがって、本牡丹蝶鳥大形鏡・牡丹双鳥大形鏡は、宋鏡の鏡背意匠の影響下で13世紀初頭頃より作鏡が開始され、14世紀中頃には消滅した鏡背意匠であり、鏡式であると把握できよう。つまり、大形鏡自体もこの頃消滅し、室町時代には一般に小形化した中形鏡へと推移する。

以上の如く、報国寺蔵牡丹蝶鳥鏡は鎌倉時代の作鏡上完成期の和鏡であり、鎌倉に遺存する代表的な鎌倉鏡であると言えよう。

鎌倉の出土鏡 (図 5-1・図 5-2)

鎌倉での出土鏡は、現在総数16面を数える。本来は、個々の出土鏡について記述すべきであるが、紙幅の都合上、鏡をグループで捉え以下記述する。

蝶鳥鏡

鎌倉出土鏡に蝶鳥鏡が多いことは前述した通りであるが、これ等の鏡の製作年代については土層・遺構・伴出遺物等から凡その年代は把握できるものの、詳細年代について経塚とは異なり生活跡や墳墓からは所属年代を明示する伴出遺物等は何らない為、残念ながら不明である。

そこで、広瀬都巽による『扶桑紀年銘鏡図説』(以下『図説』と略記する)に掲載された紀年銘を参考として時代的考察を試みるものである^{註25}。

図6は、『図説』に掲載された蝶鳥鏡21面中12面を選抜したものである^{註26}。除外理由は、同書の収載目次「10天治元年(1124)の山吹蝶鳥鏡」の如く大きく欠損した破鏡であるため、拓影からは“蝶”が確認できないものや『図説』、「71 永享10年(1438)山吹蝶鳥鏡」の如く明らかに鎌倉時代前期の所産であるのにも拘わらず、伝世に伴い後年の紀年銘を有する等の理由からである。

これ等の紀年に関する情報を有する鏡は、経塚に埋納された鏡であるところから経筒に刻された紀年銘からの年代情報であることが共通する特性である。また、『扶桑紀年銘鏡図説』は、1938年の著作であって約80年を経過しているが、和鏡研究史の上では先駆をなす古典的ともいえる資料である。当該書の集成表を使用する理由は、戦後発掘調査は激増したことは事実であるが、遺構の特性から経塚そのものの調査はさほど増加することがなかったことと、さらには和鏡を伴出した場合であっても蝶鳥鏡は中世和鏡の中でも相対的に面数が少ない等による理由から、当該『図説』が未だ基本資料であることによる。

蝶を描く最古の蝶鳥鏡は、図6-1の1103年の紀年の倭文神社境内経塚出土草花蝶鳥八稜鏡である。本鏡は、国内で生産された和鏡成立以前の倭鏡であるところから、唐鏡の特徴を各所に留める。具体的には、鏡の形式が円ではなく六稜形式であることや界圏が無く鈕の形式、蝶を含めた鏡背意匠からも和鏡以前の形式の鏡であることは明白である。当該六稜鏡に蝶が描かれていることは、鏡背意匠に描かれる蝶は唐様式の文様であることを示唆するものと把握されよう。

図6-2は、保安3年(1122)・天治元年(1124)在名の2本の経筒に伴い検出された蝶鳥鏡である^{註27}。広瀬は、収載目次に「数年前の所鑄ならん」と記している。ただし、図6-3の仁平2・3年(1152・53)の数年下るのではないかと観察される。

つづいて、図6-4～6は何れも経塚出土でそれぞれ経筒に仁平3年(1153)、写経奥書に仁平4年(1154)、経筒に保元2年(1157)の紀年銘を有する資料である。図6-5・6は、和鏡の一特質でもある界圏を配置しないところからも、宋鏡の影響を未だ残す鏡背意匠である点が特徴である。この種の鏡類は、愛知県多度神社経塚から多数検出している鏡類であり、概ね12世紀後半頃の所産であろうが絶対年代は定かではない。

図 6-7～9 は、1157 年の紀年を有する蝶鳥鏡で、鏡縁・鈕座・界圈・意匠においても和風化の完成期の所産であると看取される。図 6-9 は、鏡縁の肥厚が認められる。図 6-10～12 は、1255 年の紀年銘を有し典型的な鎌倉時代前期の鏡制を示すものであると同時に、蝶が布置される最後の鏡となることになる。

したがって、蝶を描く蝶鳥鏡は、12 世紀初頭に唐鏡の流れを踏襲すると想定される宋鏡の影響下において出現したものと考えられ、紀年銘鏡の年代が示す 1255 年、即ち 13 世紀中葉に消滅したことが窺い知れる。当該意匠の発生理由とまた消滅理由は、明らかにし得ないが、蝶文の鏡に関しては室町時代の所産として京都国立博物館所蔵の群蝶鏡や黒川古文化研究所所蔵の群蝶双鶴鏡に代表される蝶鳥鏡が認められる。

図 6-9 は、全体の三分の一を欠損の為、蝶鳥鏡か否かは不明であるが蝶鳥鏡の可能性は高いものと推定される。明確な蝶鳥鏡は、図 6-9 を除く図 6-1～8 の 8 面を数える。鎌倉出土の蝶鳥鏡を前記した紀年銘鏡と対照した場合、大きく二大別できるものと考えられる。まずは、図 6-1～6 の蝶鳥鏡は、面径がやや小ぶりの点と鏡縁の肥厚化が未だ認められず薄いところから、12 世紀中葉ころの所産と把握できよう。対して図 6-7～9 は（約三分の一欠損の為、蝶鳥鏡か否かは不明）厚縁の鏡制であるところから、図 6-10～12 と同様の 12 世紀末から 13 世紀極初期の所産と観られる。

以上の蝶を描く鏡は、すべて平安時代末から鎌倉時代前期の所産である点が大きな特徴である。まず、平安時代末～鎌倉時代前期の所属する 8 面すべてに蝶が描かれていることは、決して偶然ではないと考えられるのである。確かに全国的視野に立脚した場合、全国的には散見され、蝶を描く鏡は決して珍しい資料ではない。しかし、100 パーセント蝶鳥鏡であるのは事実であって、鎌倉の出土鏡のみであると断言できるのである。例えば、逆現象であるが平安時代後期から鎌倉時代前期の鏡が最も多く含まれる山形県の出羽三山神社のお手洗池出土で出羽三山神社博物館に所蔵されている約 190 面の羽黒鏡を見た場合、当該鏡群のなかに蝶鳥鏡は確認されないのである。

したがって、全国的に散見されるといっても、類例の少ない意匠を有する鏡であるところから鎌倉での集中は特異であり、何らかの理由が存在するものと考えねばならない。

池田浩貴による『吾妻鏡』黄蝶群飛記事一覧によると、5 件の黄蝶群飛記事が集成されている^{註 28}。最初は文治 2 年（1186）の黄蝶飛行記事であり、続いて建保元年（1213）の黄蝶群集記事・宝治元年（1247）の黄蝶群飛記事・最後となる宝治 2 年（1248）の黄蝶飛行記事と同じく宝治 2 年の黄蝶群飛記事が挙げられている。具体的には、1186 年に記事の記載は開始され、1248 年以降には蝶に関する記事は全く記載されていない。前記した如く、蝶鳥意匠に関しては『図説』に見る限りでは建長 6 年（1255）を最後に終了していることは述べたとおりである。

つまり、『図説』によれば蝶鳥鏡は、通常の小形鏡（面径約 11cm）の場合 13 世紀中葉で終了すると同様に、『吾妻鏡』黄蝶群飛記事の終了とほぼ時期が同じである点が確認できる。しかし、理由については不明であり今後の課題としなければならない。なお、蝶鳥鏡背に描かれた蝶は、『吾妻鏡』に記された黄蝶であるかどうかは、鏡背文様は原則的に色彩を伴わないところから黄蝶か否かは不明である。

また、大形鏡の場合は、これも前述した図 4-5 の建武 2 年（1335）の紀年銘を有する浄信寺鏡が存在する。信頼できる紀年銘であると観察されるところから、大形鏡においては 14 世紀半ばまで描かれたこととなる。この点に関しても理由は不明である。鏡に描かれた蝶は、所謂胡蝶と揚羽の 2 種であり、大形鏡には揚羽が描かれている点が一部を除いては共通特性であると指摘できよう。



1 水草蝶鳥鏡



2 桜花浮線稜文蝶鳥鏡



3 花菱浮線稜文蝶鳥鏡



4 菊花浮線稜文蝶鳥鏡 長谷寺蔵



5 蝶松喰鶴鏡



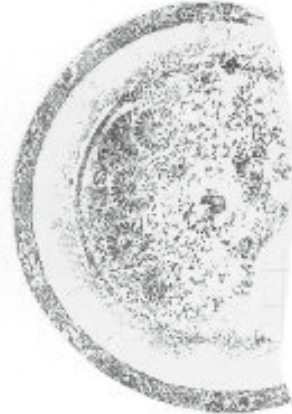
6 半菊花散蝶鳥鏡



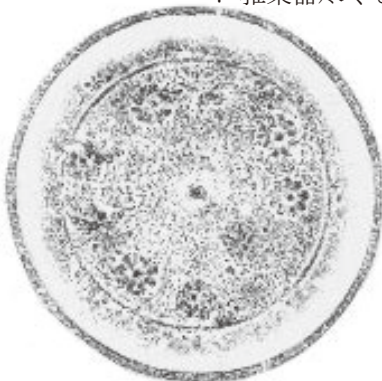
7 雅樂器尽くし蝶鳥鏡



8 梅樹双雀鏡



9 菊花蝶鳥もしくは菊花双雀鏡



10 山吹散らし双雀鏡



11 籬菊双雀鏡



12 桜花双雀鏡

図 5-1 鎌倉出土和鏡拓影



13 水辺双雀鏡



14 州浜千鳥鏡



15 蓬莱鏡



16 幸菱桜文鏡

図 5-2 鎌倉出土和鏡拓影

番号	鏡名	遺跡名	銅鏡リスト番号
1	水草蝶鳥鏡	今小路西遺跡	
2	桜花浮線稜文蝶鳥鏡	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	8
3	桜花浮線稜文蝶鳥鏡	史跡 永福寺	14
4	菊花浮線稜文蝶鳥鏡	長谷観音堂周辺遺跡	2
5	蝶松喰鶴鏡	北条時房・顕時邸跡遺跡	5
6	半菊花散蝶鳥鏡	杉本寺周辺遺跡	11
7	雅楽器尽くし蝶鳥鏡	大倉幕府跡	7
8	梅樹双雀鏡	横小路周辺遺跡	10
9	菊花蝶鳥もしくは菊花双雀鏡	若宮大路周辺遺跡郡	14
10	山吹散らし双雀鏡	不明	番外
11	籬菊双雀鏡	若宮大路周辺遺跡郡	4
12	桜花双雀文鏡	若宮大路周辺遺跡郡	6
13	水辺双雀鏡	今小路西遺跡千葉地遺跡	1
14	州浜千鳥鏡	大倉幕府周辺遺跡群	12
15	蓬莱鏡	不明	番外
16	幸菱桜文鏡	材木座町屋遺跡	13

表 1 鎌倉出土和鏡一覧

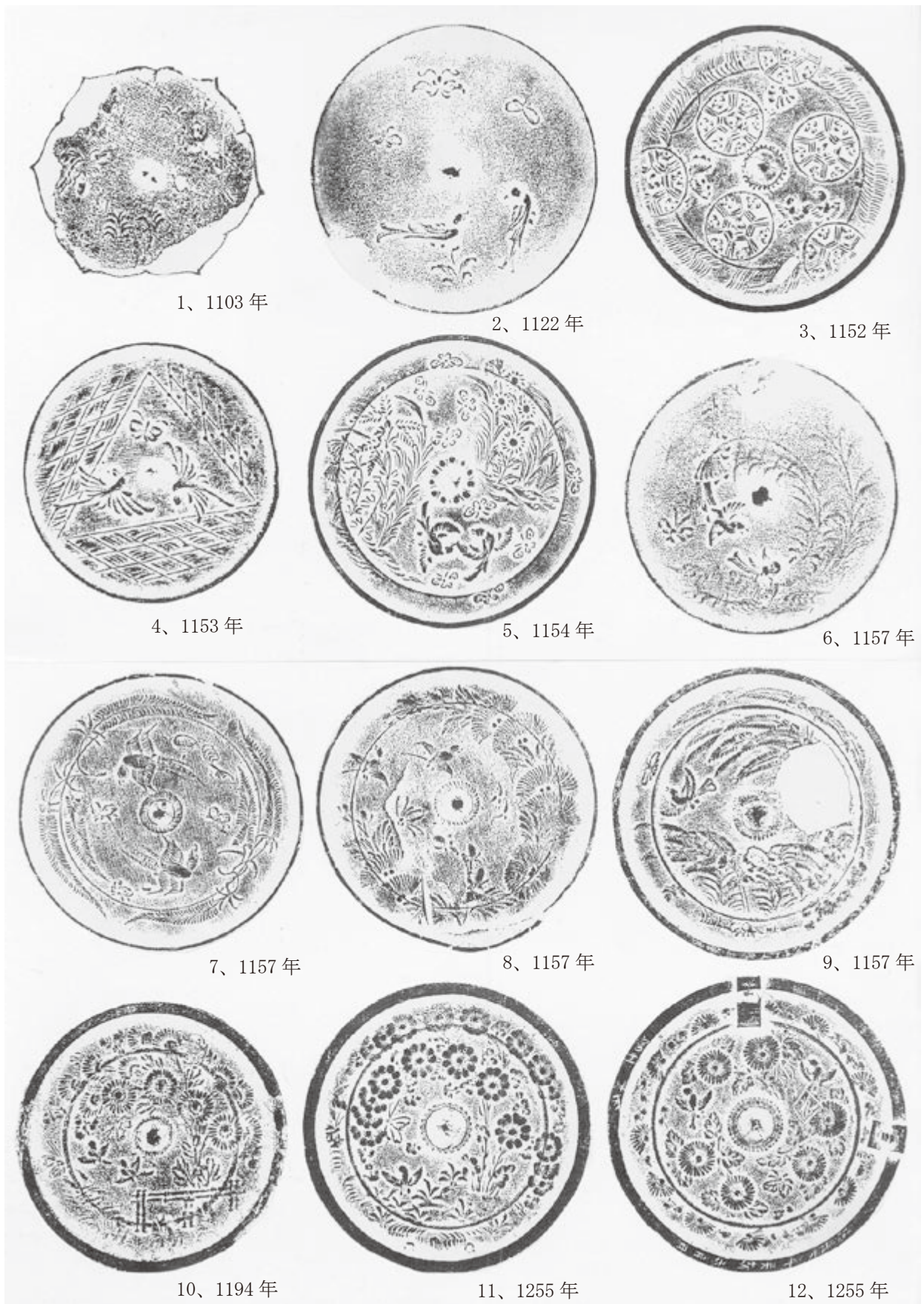


図6 紀年銘を有する蝶鳥鏡 (『扶桑紀年銘鏡図説』より作成)

浮線稜文蝶鳥鏡 (図 5-1-2~4)

浮線稜文(団窠文)鏡は、平安時代に鏡の和風化の中で出現した鏡背意匠であるが、唐鏡に認められる団窠浮文であるところから、唐鏡意匠の模倣による和風文様と看取される。図 5-1-2・3 の浮線稜文鏡は、蝶鳥鏡でもあり、写真 12 の当時広瀬都巽所蔵の楓葉地浮線稜文鏡(以下楓葉と略記)は 1261 年の紀年を有し、亀甲地浮線稜文蝶鳥鏡(以下亀甲地と略記)は、1152 年の紀年を有する。両鏡と対照すると、両者の間には、約 100 年の時代差が存在している。1261 年の楓葉は、拓影からは蕊座鈕を置き太線の界圏を有し、鳥は雀ではなく鳳凰らしき尾長を付置しているのに対し、1152 年の亀甲地鏡の界圏は細線であり、双雀を付置している。また、鏡縁も薄い。亀甲地は、浮線稜文は内区のみにも留まり、楓葉は外区にも及んでいる点が特徴である。

以上から、鎌倉出土の図 5-1-2~4 は、時間差は若干存在するものの鏡胎の厚さ等の鏡制が同様である点と和風化の象徴の一つでもある双雀が附置されるところから、12 世紀中葉から後半にかけての所産と観察される。



写真 12 (『扶桑紀年銘鏡図説』より作成)

蝶松喰鶴鏡 (図 5-1-5)

回施式による通常の松喰鶴意匠鏡に、蝶 2 頭を付置する点が特徴で、極めて類例の少ない鏡であるといえよう。製作時代は写真 12 の右の紀年銘鏡に類するところから、平安時代極末期から鎌倉時代極初期の所産に比定されよう。

雅楽器尽くし鏡 (図 5-1-7)

雅楽器を描いた鏡は、愛知県の東観音寺所蔵の室町時代に比定される“楽器散双鳳鏡”が確認されるが、極めて数少ない鏡背意匠で鎌倉時代の所産では論者が知る限り鎌倉出土の“雅楽器尽くし鏡”が唯一の鏡であろう。当該鏡の意匠に関する詳細は、2015 年刊行の『鎌倉の埋蔵文化財 19 平成 26 年度発掘調査の概要』に詳しいので、本稿では割愛する。鏡縁の形状・界圏・鈕座の形状等から鎌倉時代前期の所産と観察される^{註 29)}。

図 5-1-10~12・図 5-2-13 は、鎌倉時代後期、図 5-2-14~16 は室町時代の所産と観察される。中でも、図 5-2-15 の蓬萊鏡は筐押しも粗雑であった為か、鑄上りは悪い。図 5-2-16 は室町時代後期に比定される所謂髭鏡である。

まとめ

図 5-1・2 の鎌倉出土鏡は、前にも述べた通り 2 面の室町時代鏡を除き、14 面は平安時代末から鎌倉時代に比

定される和鏡である。また、「1、鎌倉出土鏡の記録と研究史」で記した種々の書籍で紹介された鏡で現在実物が確認されない和鏡もすべて鎌倉時代の鏡とみられる点が特徴である。

鎌倉での鏡の使用方法は、化粧道具であると同時に精神観念に基づく使用が確認される。まずは、材木座の飯島出土の12面の和鏡は、前掲の『鎌倉の中世出土品』で記されているように^{註30}、やぐらを転用した小祠の荘厳で有れば、後天的な単孔もしくは双孔は“やぐら”内の木製構造物である柱・梁への固定を目的とした孔であると見られる。即ち、荘厳具としての使用である。鏡は、鎌倉時代から室町時代に亙るところから、鏡も転用であったと看取されよう。

次いでは、写真7で上掲した鳥居東方地点上層の土壌墓写真で明確であるように、明らかに死者を守る鏡であり辟邪を目的とした和鏡の使用である。本事例の如くの中世墳墓での和鏡の副葬は、全国的に認められる使用例である。明確な“やぐら”への副葬は不明瞭であるが、当然存在したであろう。

また、図5-1-9は、加熱による焼損と観られるところから、火災等による原因も想定しなければならないが、小樽市に所在する入船・大川遺跡の鎌倉時代の中世墓では、火葬に際しても和鏡が同時に焼かれた複数の事例も確認されるところから、同様な使用も想定しなければならないと考える^{註31}。

さらには、永福寺の正面に位置する経塚山出土の経筒と見做される13世紀初頭の常滑壺の蓋として用いられていた鏡がある。この場合の鏡は、経典に迫り来る邪悪なものに対する辟邪を目的とする使用である。

鏡の制作については、前述した蝶鳥鏡に見られるように平安時代後期の所産と観察される鏡が多数遺存しており、これらは京で製作され、直接持ち込まれた鏡であろう。今日判明している鏡製作工房は、京都の平安京左京八条三坊付近（京都駅北側周辺）・京外の白川地区（京都大学構内遺跡）・平泉・大宰府条坊跡が明確である。中でも、京都駅周辺再開発に伴う遺跡調査で平安時代から鎌倉時代に比定される夥しい鏡鑄型が検出されている事実からすると、久保智康が指摘するように“京都ブランド”として確立されていたことは^{註32}、羽黒鏡・伊豆諸島をはじめとする全国から出土する中世和鏡の精選度からも肯定されようし、鎌倉においても同様な観念の支配であったであろうことは十分に予測し得る点である。承久の乱頃までは、九条頼嗣を摂家将軍として鎌倉へ迎えているところからも京文化の受容は、精神面に留まらずあらゆる物品の流入にあったことは、鏡は基より青磁・白磁・鍍金の荘厳具などの出土遺物からも積極的に理解されよう。

13世紀中頃で、蝶鳥鏡の消滅、すなわち“京ブランド”からの離脱は、承久の乱を経たころから始まり、1274年文永の役までの13世紀中頃に相当する期間は、鎌倉幕府の安定期への移行を直截的に原因とするものと考えられる。

1994年に宗臺により、INK遺跡出土の鑄型から鎌倉での作鏡の指摘があったことは確認したとおりであるが、鏡背部に相当する鑄型、すなわち鏡背意匠を留める鑄型片が認められないところから鎌倉での鏡製作は、現段階では断定できないのが現状であろう。また、上記したごとく京文化受容を中心とする社会情勢下において、少なくとも鎌倉時代中期までの鏡制作はなされていなかったと考えるのが妥当であろうか。仮に、INK遺跡出土の鑄型が鏡鑄型であった場合は、おそらく図5-1-10・11・図5-2-15等に相当する鎌倉時代後期の和鏡群かと推定される。

和鏡の科学保存について

鎌倉出土の発掘調査による和鏡の大半は、保存処理がなされているのが現状である。真空含浸による科学保存処理によるものと観察されるが、和鏡を含め銅製品に関してはブロンズ病でない限り不要な処理であると考えられる。

つまり、何が問題であるかという点、緑青や緑青と融合した土を剥離・清掃することなく強化液で錆・土もろとも硬化させている点、さらには硬化薬品と処理技術にもよるが、発生する光沢が不具合なのである。結果として、陽鑄により表現された鏡背意匠の視認性を極端に低めることとなった銅鏡を全国で目にすることは決して珍しくない。博物館資料においては、展示と保存は相矛盾する行為であることは確認するまでもないが、鉄製品の如く錆化が進行する金属の場合は別として、銅鑄はブロンズ病でない限りは安定しているのであるから、おしなべて含浸保存を施して良いものではない。

銅鑄に対する伝統的保存方法は、象牙製の角篋による除去である。角篋での緑青および付着砂粒をこそげ落とす方法で、鉄鏝等の錆落としと同一方法である。その上で丁字油・椿油等の植物性油を塗付することにより錆化は防止でき、不自然な照りはなく歴史資料としての古色をも保ったうえで公開することが自然であって、歴史資料の現在社会での活用の基本である展示の用に供せる資料となると考える。鏡は、美術工芸品であるから、鏡自体が現代人の見学者に対しても見せる力を有しているのであるから、基本として鏡背意匠は勿論のこと鑄造技術等を見る者にとって観察できなければ何らの意味も持たないことになる。したがって、錆・砂粒の薬品固定は、資料の視認上の問題だけではなく、写真・拓本・レプリカ等の2次資料作成に関しても不都合であり、研究方法の上でも差し障りが発生する。



写真 13 鎌倉歴史文化交流館での特別展“鏡の文化史—水鑑から魔鏡まで—”での鏡の展示
(左) 保存処理され細部が見えない出土鏡 (右) 伝統的保存法に拠る伝世鏡

註

註1 赤星直忠 1977『中世考古学の研究』 有隣堂 pp. 87-92

註2 沢寿郎編 1972『鎌倉-鎌倉史蹟めぐり会記録』鎌倉文化研究会 pp. 344-346

註3 赤星直忠 1977「鎌倉の経筒」『中世考古学の研究』 有隣堂 pp. 438-447

註4 渋谷二郎 1971『鎌倉の中世出土品 鎌倉国宝館図録(18)』鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館 図版 27 p. 26

註5 鎌倉市教育委員会編 1974『鎌倉の文化財 第4集 鎌倉市指定編(四)』pp. 42-43

註6 岡山仁 1982「千葉地遺跡出土の和鏡」『鎌倉考古』No.11 鎌倉考古学研究所 pp. 2-4

註7 鎌倉国宝館 1984『鎌倉国宝館落成記念 館蔵名品展』

- 註 8 鎌倉国宝館 1985『鎌倉の金工』
- 註 9 石井進・大三輪龍彦 1989『よみがえる中世3』(株)平凡社 p.216
- 註 10 鎌倉考古学研究所 1989『古都鎌倉の埋蔵文化財』鎌倉古都展実行委員会
- 註 11 宗薨秀明 1994「鎌倉市内出土の鏡鋳型」『かまくら考古』 No.31 鎌倉考古学研究所 pp.1-4
- 註 12 蘇れ黄金・平泉祭実行委員会編 1995『平泉と鎌倉—永福寺遺物展記念—』 p.53
- 註 13 鎌倉国宝館編 2013『没後 750 年記念特別展 北条時頼とその時代』 pp.90-91
- 註 14 菊川泉 2015「永福寺のもう一基の経塚」『鎌倉考古』第 27 号
- 註 15 註 5 と同じ
- 註 16 原田一敏 2001.2「牡丹双鳥鏡考—和鏡における絵画意匠の導入と同一文様の形式的変遷—」『MUSEUM』No.570 pp.7-26
- 註 17 1996「新編鎌倉志 卷之三」『大日本地誌体系 24 新編相模風土記稿』第 6 卷 雄山閣 pp.50-51
- 註 18 『元亨釋書』:1332 年に朝廷に上程された、全 30 卷からなる仏教通史
- 註 19 『日件録』:五山僧瑞溪周鳳が天安 3 年(1446)から文明 5 年(1491)まで記した日記
- 註 20 『東関紀行』:作者不詳 鎌倉時代の紀行文。約 2 ヶ月の鎌倉滞在の中で、実見。
- 註 21 王刃杯 2010『清华銘文鏡』 清华大学出版会 p.160
- 註 22 中野政樹 1974「8 工芸品 銅造 古鏡」『鎌倉の文化財 第四集 鎌倉市指定品(四)』 p.43
- 註 23 註 16 と同じ
- 註 24 久保智康 1999『日本の美術 3』思文閣 p.35
- 註 25 広瀬都巽 1938『扶桑紀年銘鏡図説』 大阪市立美術館 p.13
- 註 26 註 25 と同じ
- 註 27 註 24 と同じ
- 註 28 池田浩貴 2015「『吾妻鏡』の動物怪異と動乱予兆—黄色群飛と鷲怪に与えられた意味付け—」『常民文化』第 38 号 pp181-206
- 註 29 鎌倉市教育委員会 2015『鎌倉の埋蔵文化財 19 平成 26 年度発掘調査の概要』
- 註 30 赤星直忠 1977『中世考古学の研究』 有隣堂 pp.87-92
- 註 31 青木豊 1996「入船遺跡・大川遺跡出土和鏡」『一九九五年度余市入船遺跡発掘調査概要』 余市町教育委員会
- 註 32 註 24 と同じ